

[所 感]

長崎市議会議員 野口 達也

## サントス市姉妹都市40周年記念公式訪問団報告書

### ① 訪問目的

### ② 訪問期間

### ③ 訪問先

### ④ 訪問行事 については、下記および別紙報告書の通りである。

#### 1、サントス市訪問(8/28～30)

パパサントス市長との意見交換のあと、姉妹都市提携40周年記念式典が行われ、2014年に長崎電気軌道(松本容治社長)の路面電車をサントス市に寄贈することが決まっている電車のハンドルなどの部品を目録代わりに手渡した。この後、南米最大のコーヒー輸出港とコーヒー輸出に伴い発展してきた市街地の中を、観光用路面電車で観光。同市内のサーフィン博物館で両市が共催する原爆写真展のオープニングセレモニーが行われた。

南米最大のコーヒー輸出で発展してきた旧市街地は、現在いたるところで再開発が計画されており、海岸線7キロに及ぶ砂浜を活用した新しいリゾート観光との融合が課題(中井貞夫市議会議員)という。

今回の記念事業のメインである、長崎市中学生選抜とサントスFCジュニアチームの親善試合では、点数差はあったものの試合ごとに長崎の選手も声が出始め、最後に行ったチームを混合しての紅白戦では、言葉の壁は無くなり全員が大声やゼスチャーでボールを奪い合う姿に、スポーツ親善の意義の大きさ・深さを感じた。また、世界有数のクラブチームとしての大会スタジアム、練習会場(天然芝グラウンド2面、人工芝1面)、クラブハウスには宿泊施設、トレーニングルームなどが完備された設備の中で、リベロ会長やブラジルのスーパースター・ネイマール選手との記念写真は、これからの長崎を背負う中学生にとって素晴らしい贈り物であり、一人でも世界に羽ばたく夢を持つ選手に育って欲しいものである。

サントス市では、在伯日本人会の皆さんと日本人学校を見学、食事会を兼ねた意見交換会では、初の移民3世として会長となった土井紀文セルジオ会長やサントスの日本語学校返還に向けて尽力した一人として日本政府から旭日単光章を受勲した遠藤浩前会長をはじめ、多くの移民1世の皆さんから当時の生活や苦労を直接日本語で聞くことができた。

## 2、サンパウロ市訪問(8/31～9/3)

サンパウロ州議会やサンパウロ総領事館を訪問、小林雅彦主席領事からは、ブラジル国内での日本からの移民された皆さん・子孫がブラジルの政・財界で活躍されており、今後の日・伯友好に期待を持っているとのことであった。

### (1) 海外技術研修員・県費留学生との懇談会

北海道協会交流センター（サンパウロ市）で、長崎県・市の訪問団とサンパウロ州教育局マリア・クリスティーナ・ノゲロル・カタラン女史、川添博長崎県人会長、海外技術研修員や県費留学生など約30名の出席のもと、懇談会が開催された。

懇談会では、研修生や留学生から来崎時の印象に残っていることや現在の活動状況などについて報告を受けた。これからの研修事業について、ブラジルからの研修員枠の増員要望が出され、今後、海外技術研修員制度のあり方を検討することとした。

また、サンパウロ州教育局からサンパウロ市内にあるサンパウロ州立長崎小学校と長崎県の小学校との交流事業についての提案があり、長崎市内の小学校との交流事業が検討されることとなった。

### (2) 在ブラジル長崎県人会との懇談会

川添博会長ほかパラグアイ長崎県人会中山ハビエル会長、アルゼンチン長崎県人会前会長の皆さんと懇談。県人会から、長崎県との文化的・人的・経済的交流を行っていきたい。①7月に3日間、日本祭り(フェスティバル・ド・ジャポン)があり日系人が約20万人集まる。県人会を利用してビジネスチャンスとして活用してほしい。②日系人を研修生として長崎県に送り出し、期間的には短くても良いので日本を体験させてやりたい。③2014年に開催される「がんばらんば国体」に参加させてほしいなどの意見が出た。

### (3) ブラジル長崎県人会創立50周年記念式典

北海道協会交流センターで、移民1世から4世までの約200名が参加、県知事から県人会顧問の貞方賢彦さん、相談役の金ヶ江城治さん、八木健寿さんへそれぞれ功労者表彰が行なわれ、約30人の高齢者(85歳以上)の皆さんへ感謝状が贈呈された。川添会長からは県人会としての平和への取り組みが紹介され、今後も多くの催しへ取り組むとの挨拶があり、知事、市長からはこれからの県人会への期待と相互協力が述べられ、特に田上市長からは龍踊りの頭を寄贈することも報告された。

## ⑤ 所 感

まず、今回の視察においてはポルトガル語のみで英語も通じないとの情報に、言葉の障害が一番の不安材料だった。しかし、サンパウロ空港到着時から、ブラジル長崎県人会の川添博会長、大河正夫副会長、栗崎邦彦副会長をはじめとする長崎県人会の皆さんの出迎えを受け、サンパウロ滞在中は、長崎県人会の3役の皆さん、サントス市では、土井紀文セルジオ会長が朝から晩まで対応していただき、長崎と地球の反対側での生活に、一切の不自由なく過ごせたことに心から感謝したい。

田上市長は「長崎からは一番遠い国・しかし心が一番近い国」と長崎とブラジルとの事を表現している。戦前・戦後に日本からは約25万人、長崎からは6,600人がブラジルに新天地を求め移住している。同郷の先人・先輩が戦後切り開いた新天地での苦労に、日本人・長崎県人としての誇りを感じた。

長崎市は今回訪問したブラジル・サントス市やアメリカのセントポール市、フランスのヴォスロール村など世界6都市との姉妹・友好都市提携を行っているが、今回の在伯長崎県人会への対応・支援の必要性を強く感じた。私たちの先人が言葉も理解できない中で現在の長崎人としての地位を確立し、現在は移住3世から4世の世代へ移行している。今回の訪問では1世・2世の皆さんが対応して頂き、日本語での会話に不自由がなかったものの、3世以降の人たちはほとんど日本語を話せないという。川添会長は「常に、おいたちは長崎もんばいという古里を思う気持ちがあった。次世代へとバトンをつなぎ、さらに母県との交流を拡大していきたい」の言葉へ、訪問団の一員として私も力を注ぎたいと考える。

最後に、県人会創立50周年記念式典で大河正夫副会長のハーモニカの演奏による「ふるさと」を全員で合唱。「志を果たして いつの日にか帰らん 山は青き故郷 水は清き故郷」在伯長崎県人会の皆さんの目に涙が流れていたのを忘れることはないと思う。本当に貴重な体験ができた今回の訪問団であった。